

東京経済大学 学術フォーラム

「マルクス経済学の現代的スタンダードを語る」

資本主義の歴史的発展を理論的に
捉える「方法」について

2021年10月23日

泉 正樹(東北学院大学)

問題関心

- ① 〈現代〉はどのような時代か？
- ② ①に対して、「資本主義の歴史的発展を理論的に捉える」という立場を採る基礎理論は、どのような工夫を行ってきたか？
- ③ ①を考えるためには、②に加えて、さらにどのような考察領域が必要か？

- 今回は、

泉正樹 [2021] 「資本主義の歴史的発展と経済原論：
『変容論的アプローチ』からの展開」、『東北学院大
学経済学論集』第194・195号、35-57頁

と、その後に考えたことを報告してみます

概要

- 画期としての1970年代？
- 資本主義の歴史的発展を理論的に捉える
 - ✓ マルクス
 - ✓ 宇野弘蔵
 - ✓ 「変容論的アプローチ」(小幡道昭)
- 「現代」を捉えるためにさらに求められること

画期としての1970年代？

- 「資本主義」にはいくつかの画期があるといわれます
 - ✓ 「労働力の商品化」 [=「元来無理な形態」{宇野弘蔵『経済政策論 改訂版』序論(1971年)}] という論点に注目すると…
 - 旧来の社会関係を強制的に解体して「労働力の商品化」を準備する段階(発生期)
 - 15世紀末～18世紀後半(17、18世紀のイギリスが典型)
 - 商品売買の論理に基づき(景気循環を通して)再帰的に「労働力の商品化」が確保できるようになる段階(成長期)
 - 18世紀後半～19世紀後半(イギリスが典型)
 - 旧来の社会関係の自力的解消{「資本家的な社会関係の全面的展開への傾向」(前掲宇野 [1971] 19頁:引用は『著作集』第7巻より)}

➤ 確立された「機械的大工業」を輸入し、「不断の過剰人口を基礎とする労働力の商品化」(前掲宇野 [1971] 180頁)が生じる段階(爛熟期)

● 19世紀末～第1次世界大戦(株式会社形式による独占的利益の追求)

□ 進出的:ドイツ

◆ 「機械的大工業」による資本主義の導入

◆ 巨大な固定資本を要する大工業の重点化

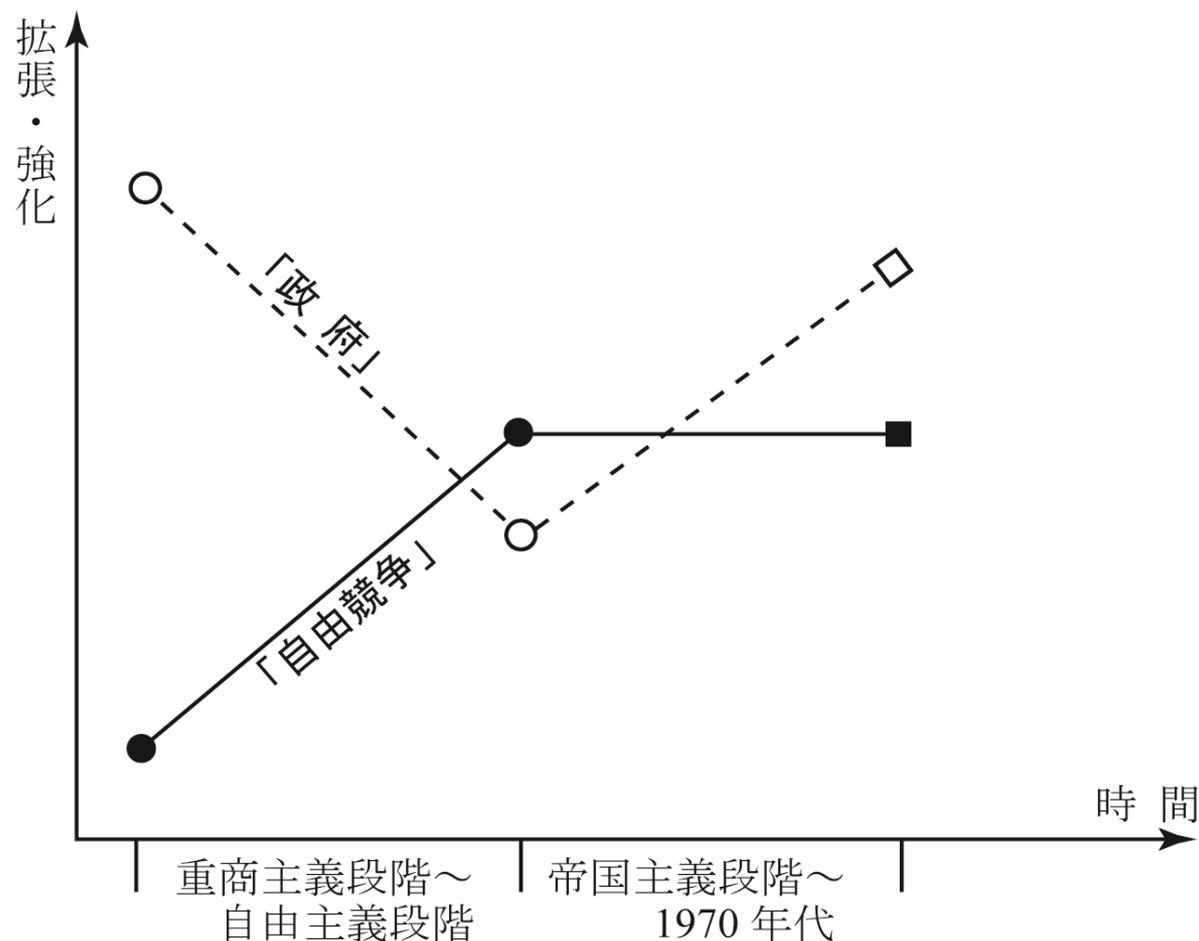
■ 旧来の社会関係の不徹底な解体

■ 高度な資本主義的發展

「政策」を「重要な補強手段として要請」(前掲宇野 [1971] 19頁)

□ 防衛的:イギリス

- こうした見方(宇野の発展段階論)は、1970年代までの現実を読み解く視点としても有効
 - ✓ 「自由競争」と「政府」との組み合わせとしてアレンジすると、第1次世界大戦後も「爛熟期」とみなせる



- 1970年代以降の現実、こうした見方では捉えきれない相貌を示しているように見えます

① 国際通貨制度の転換（金融のグローバル化）

✓ ドルの兌換停止（1971年）

□ 固定為替相場制から**変動為替相場制**へ{主要国の実質的移行:1973年、制度的承認:1976年(キングストン会議:1978年発効)}

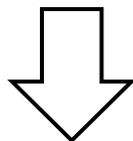
→ この時期以降、金融取引の領域にもデリバティブ(先物、オプション、スワップなど)が普及(金融**市場**の発達:**時間**を組み込んだ通貨間の関係)

→ 債権の「証券化」と呼ばれる手法も登場

その後の通貨金融
危機の素地

② 多国籍企業の躍進(「生産」のグローバル化)

- 自由な資本移動: △
- 安定的な為替相場: ○
- 自立的な国内金融政策: ○



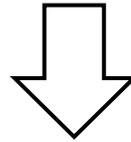
- 自由な資本移動: ○
- 安定的な為替相場: ×
- 自立的な国内金融政策: ○

→ 新興国・地域(とりわけ東アジア)における市場を活用した急速な経済発展(資本主義的発展)

□ 輸出指向型工業化政策

③ 政府機能の「新自由主義」的転換

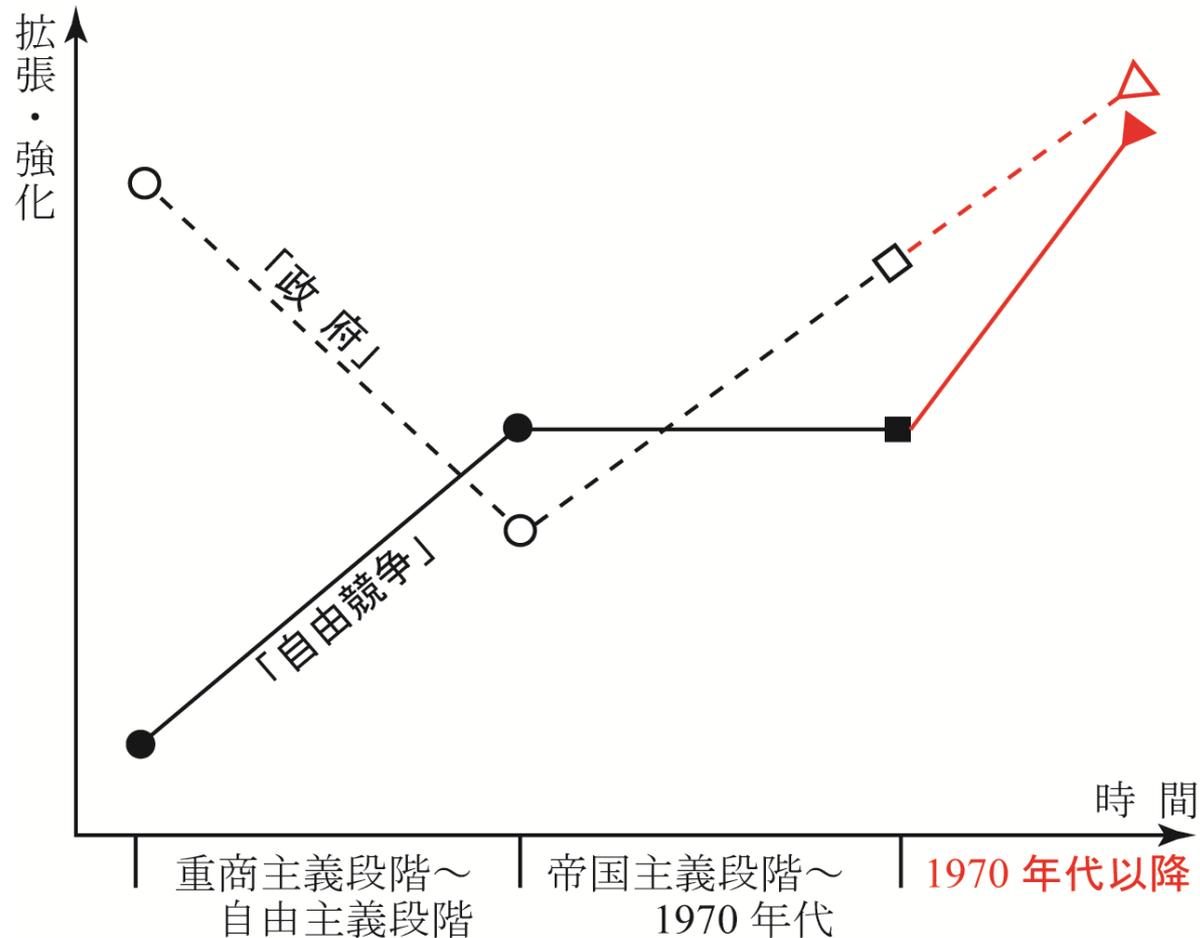
- 「ケインズ主義」に象徴される積極的な経済管理



- **市場**機能を重視した公的部門の民営化・規制緩和
 - 家事・保育・介護・医療等の市場化

- ①～③のいずれにおいても、「自由競争」は、強力な「政府(国際機関も含む)」とセットで発達
 - 「**<現代>**はどのような時代であるのか？」という問いに対して有力な回答を提示してきた**マルクス経済学**の時代認識との間に、ズレを生じさせているように思われます

- 「政府」↓ ならば「自由競争」↑
 - 「政府」↑ ならば「自由競争」→ (または ↓)
- という関係では捉えきれない1970年代以降の経験・・・



資本主義の歴史的発展を 理論的に捉える

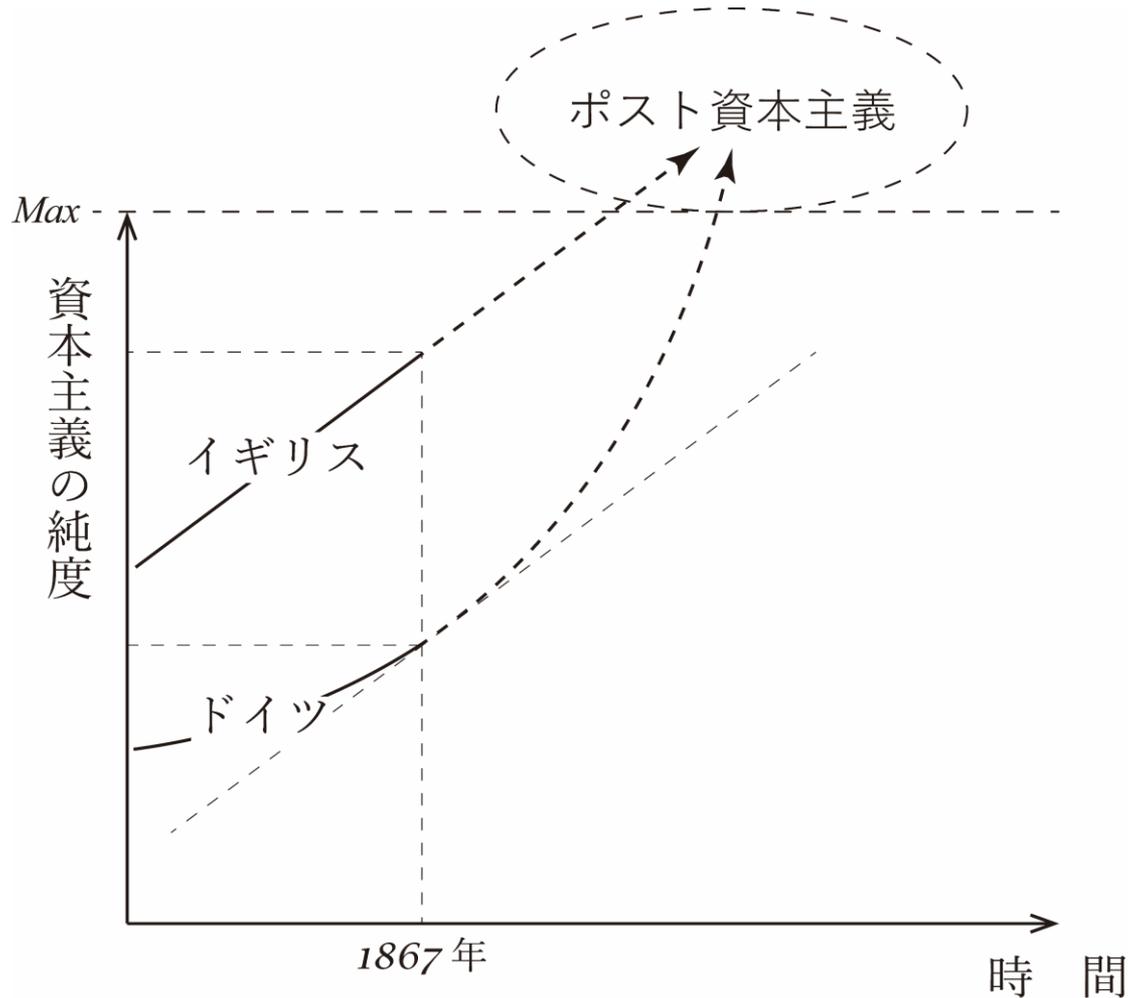
- マルクス経済学の時代認識ってどんなもの？
 - ✓ マルクス経済学＝『資本論』の検討を通して登場
 - では、『資本論』の時代認識ってどんなもの？

「産業の発展のより高い国は、その発展のより低い国に、ただこの国自身の未来の姿を示しているだけである。」{初版『資本論』序文(1867年)}

- 『資本論』は、理論展開の主要な例解として、最先端の資本主義を体現していたイギリスを引き、ドイツ語圏の読者に向けて公刊
- 資本主義には、「鉄の必然性をもって作用し自分をつらぬく」(同上)傾向がある

- ドイツに追いつけられるイギリスも、立ち止まって待っているわけではない
 - ✓ 最先端を走るイギリスも服する「傾向」とはどんなもの？
 - その解明が『資本論』の研究課題
 - 資本主義は発展すると、ある状態に行き着く…
 - 生産の大規模化(⇒ **大企業の独占**)
 - 中小・零細企業の没落
 - かつ
 - 事業における機械化の進展
 - **労働内容の単純化 & 失業問題**
- 「**資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす**」(現行版『資本論』第1巻第24章)

- 『資本論』第1巻が示した時代認識のイメージはこんな感じになるでしょうか

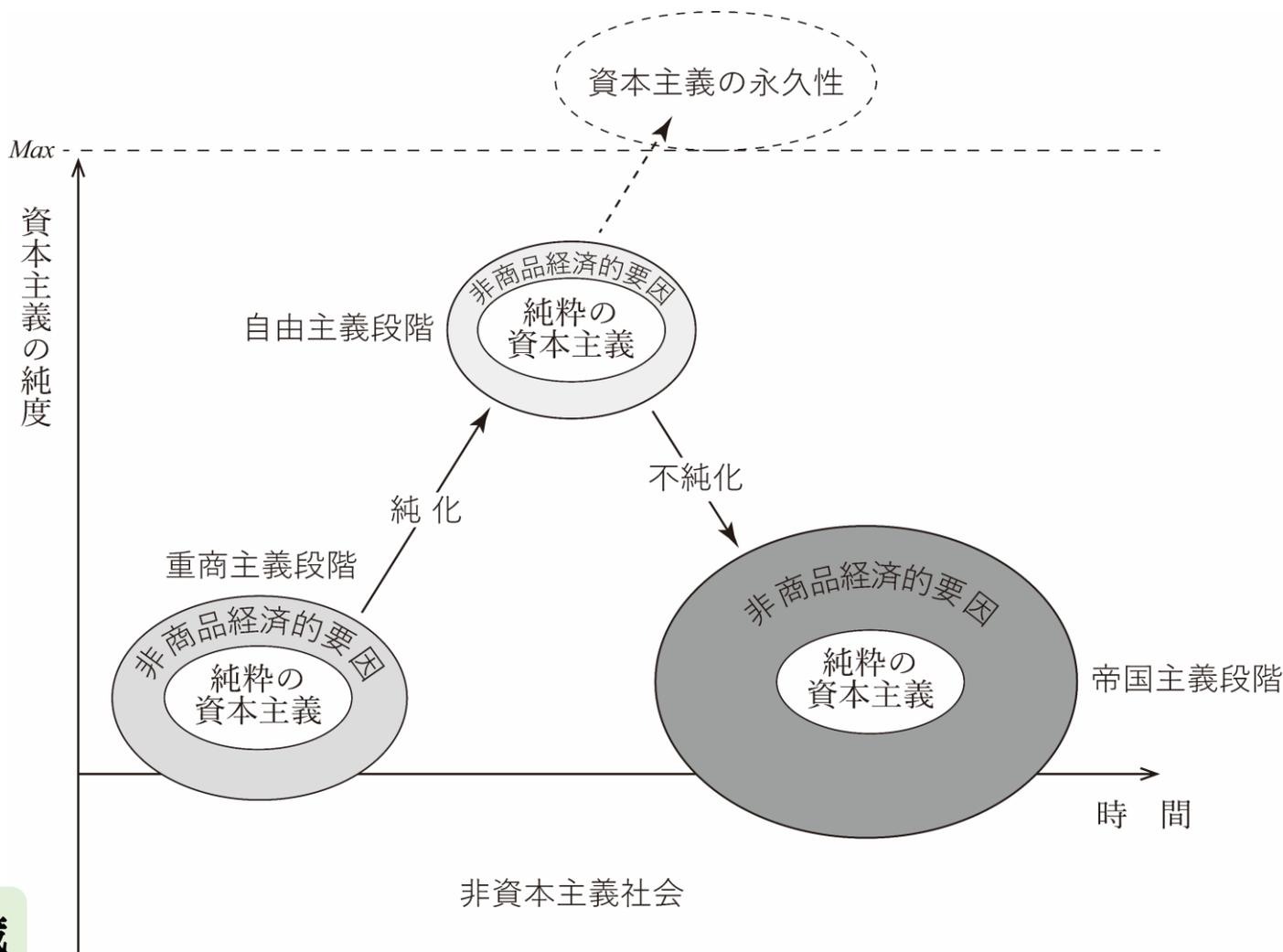


- 『資本論』第1巻が示した時代認識は、19世紀末以降の現実を踏まえて、次のように評価されるようになります

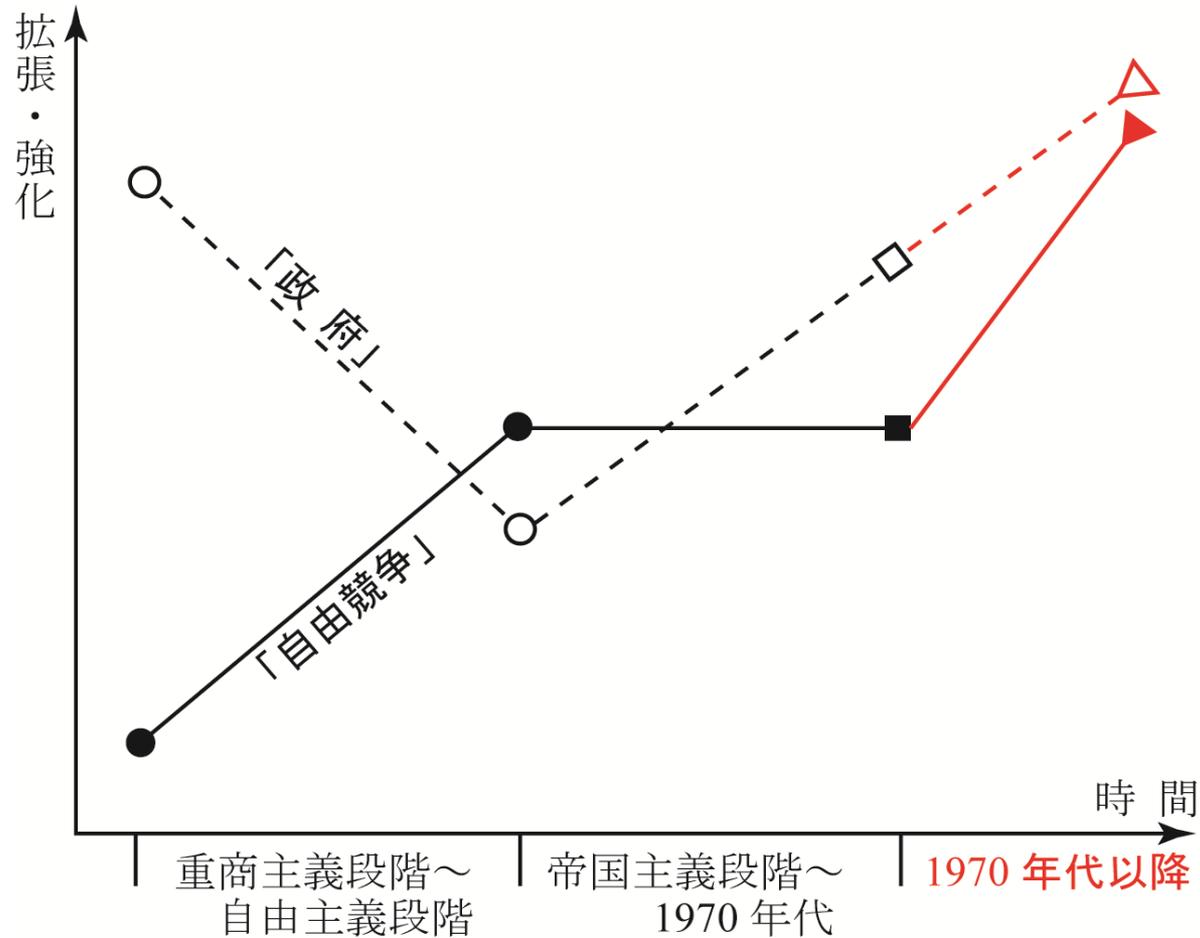
「『資本論』では、資本主義の発展は一社会を益々純粋に資本主義化するものとされていたのであった。そしてそれは慥かに十七、八世紀以来の歴史的事実に基づくものであり、また資本主義経済の一般的規定をなす経済学の原理を確立するためには欠くことのできない前提をなすのであるが、しかし歴史的発展は決してそういう純化を一筋に続けるものではなかった。資本主義は十九世紀七十年代以後漸次にいわゆる金融資本の時代を展開し、多かれ少かれ旧来の小生産者的社会層を残存せしめつつ益々発展することになったのであって、もはや単純に経済学の原理に想定されるような純粋の資本主義社会を実現する方向に進みつつあるものとはいえなくなったのである。」

宇野弘蔵『経済原論』序論(1964年)

- 資本主義の歴史的発展に対する宇野の見方は、「商品経済」(純粹の資本主義)と「非商品経済」との関係として、下図のように捉えられるでしょう



- この見方が、1970年代以降の現実にフィットしないように見えるのです



✓ 宇野の「発展段階論」の根本的な見直しが必要では？

- ✓ **労働力の商品化**という「非商品経済的要因」を想定すれば「**純粹の資本主義**」を構成できるという、「**資本主義なるもの**（＝経済原論）」に対する理解も見直すべきでは？
- 「純粹の資本主義」は、「**あたかも自立するかのごとくに**説くために、いくつかの問題をいわば**ブラック・ボックス**に入れている」{山口重克『**類型論の諸問題**』37頁(2006年:初出は1992年)}

▶ 前スライドの山口「ブラック・ボックス」論に対して

「原理論がそれ自身理論として実際には特殊な想定ないし前提のうえに展開されている点が明確にされているとあってよい。社会的生産を市場経済的な原理だけで自立的に編成することには、すでに原理的に無理があることを積極的に認めているわけである。従来 of 原理論では得てして、労働力の商品化という唯一の外的な条件さえ与えられれば、あとは市場経済的な原理だけで理論上は永久に繰り返すがごとく、その自立性を強調してきた傾向に照らしてみると、この主張は決定的な変更を求めるものであるとあってよいし、私もまたその意義を高く評価したい。{小幡道昭『マルクス経済学方法論批判』86頁(2012年:初出は1999年)}

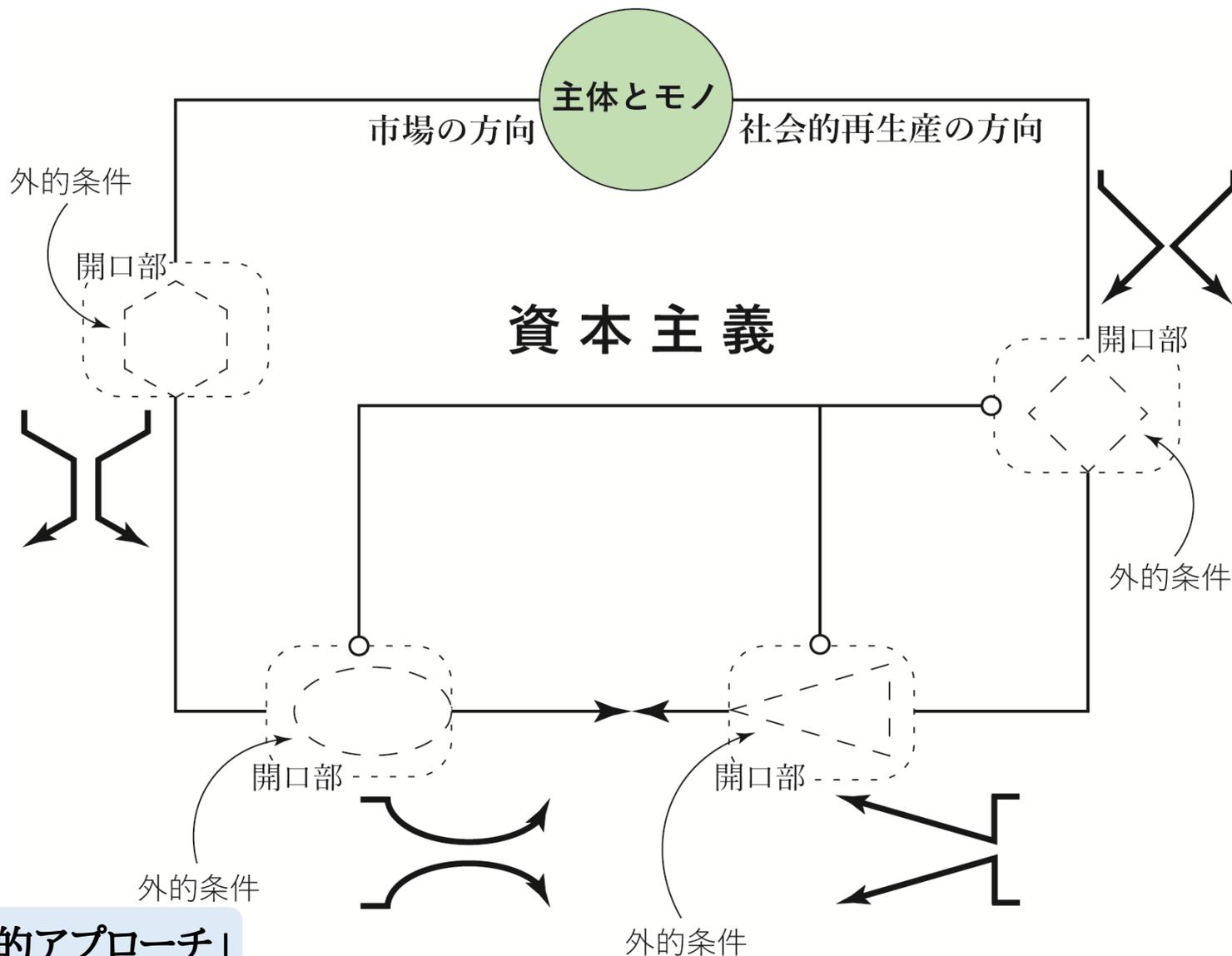
➤ そのうえで…

「原理論の論理を精密化しようとするれば、逆にどこに慣行的な規制が作用し、また制度的な補強が強く求められるのか、商品経済の原理で社会的再生産を編成しようとする場合に外的条件が組み込まれる、いわば開口部の存在が理論的に推定できるわけである。そして、そこに導入される条件如何で、資本主義の外観も変化する。」(前掲小幡 [2012] 17頁)

- 経済原論を構成する軸は「商品経済の原理」
 - その内部に、「外的条件」(「慣行的な規制」や「制度的な補強」)が組み込まれる「開口部」が存在する

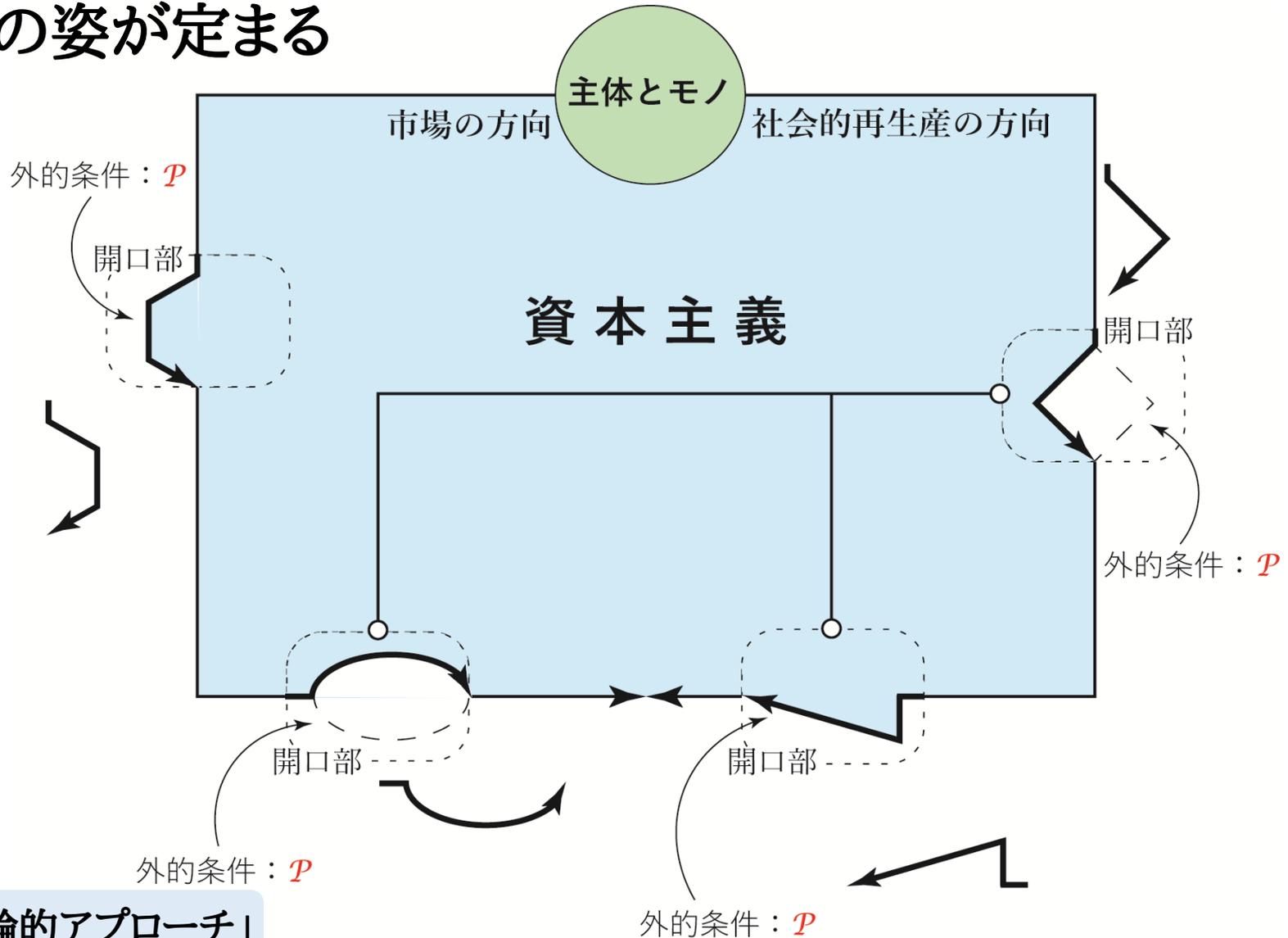
- ✓ 「資本主義なるもの」には、その「外観」を変化させる仕組みが原理的に備わっている
＝「変容論的アプローチ」

✓「変容論的アプローチ」に対する報告者のさしあたりのイメージはこんな感じです

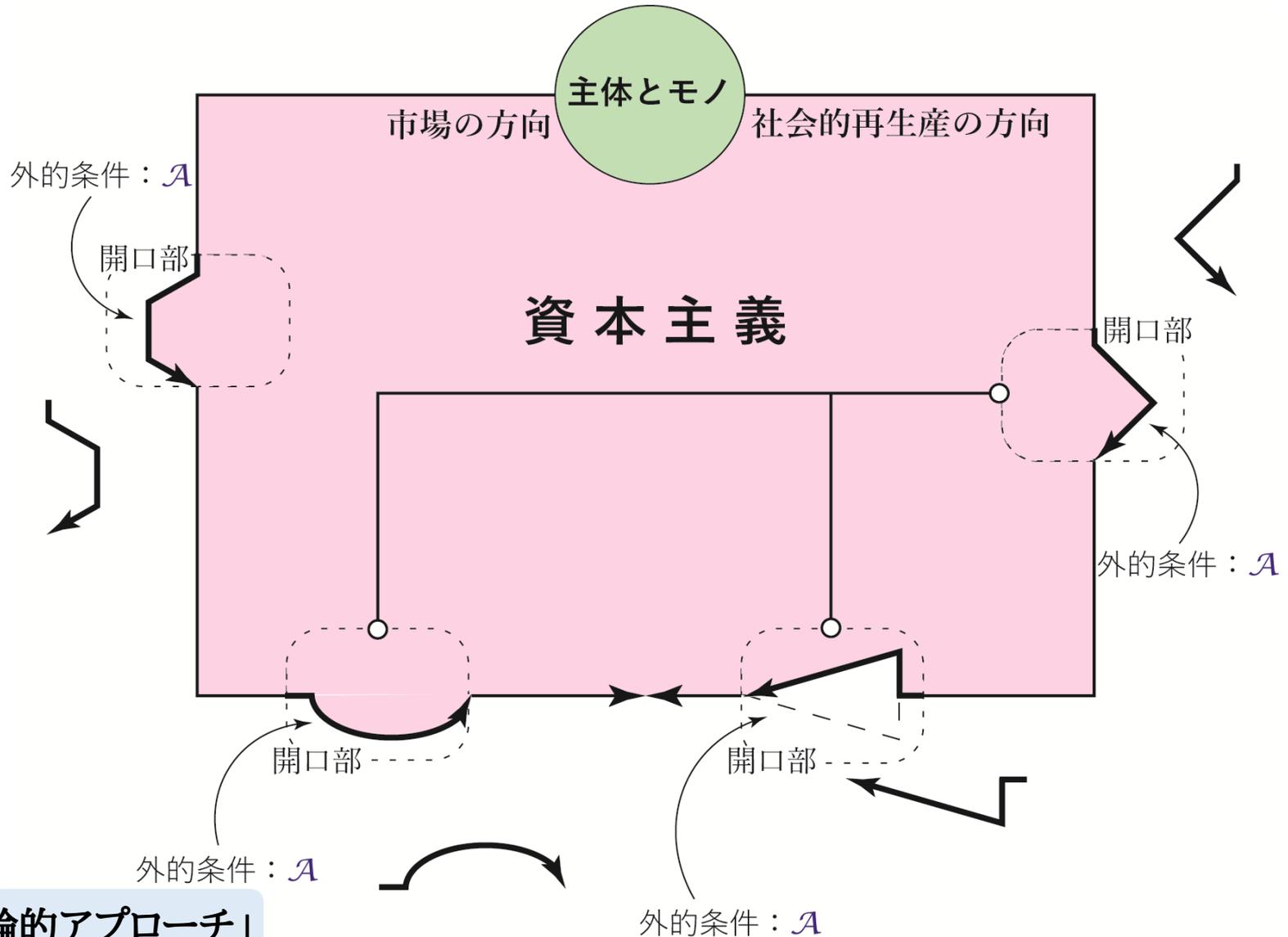


「変容論的アプローチ」

- ✓ 「開口部」に特定の「外的条件」(P)が組み込まれると、「商品経済の原理」があるかたちで接続され、資本主義の姿が定まる

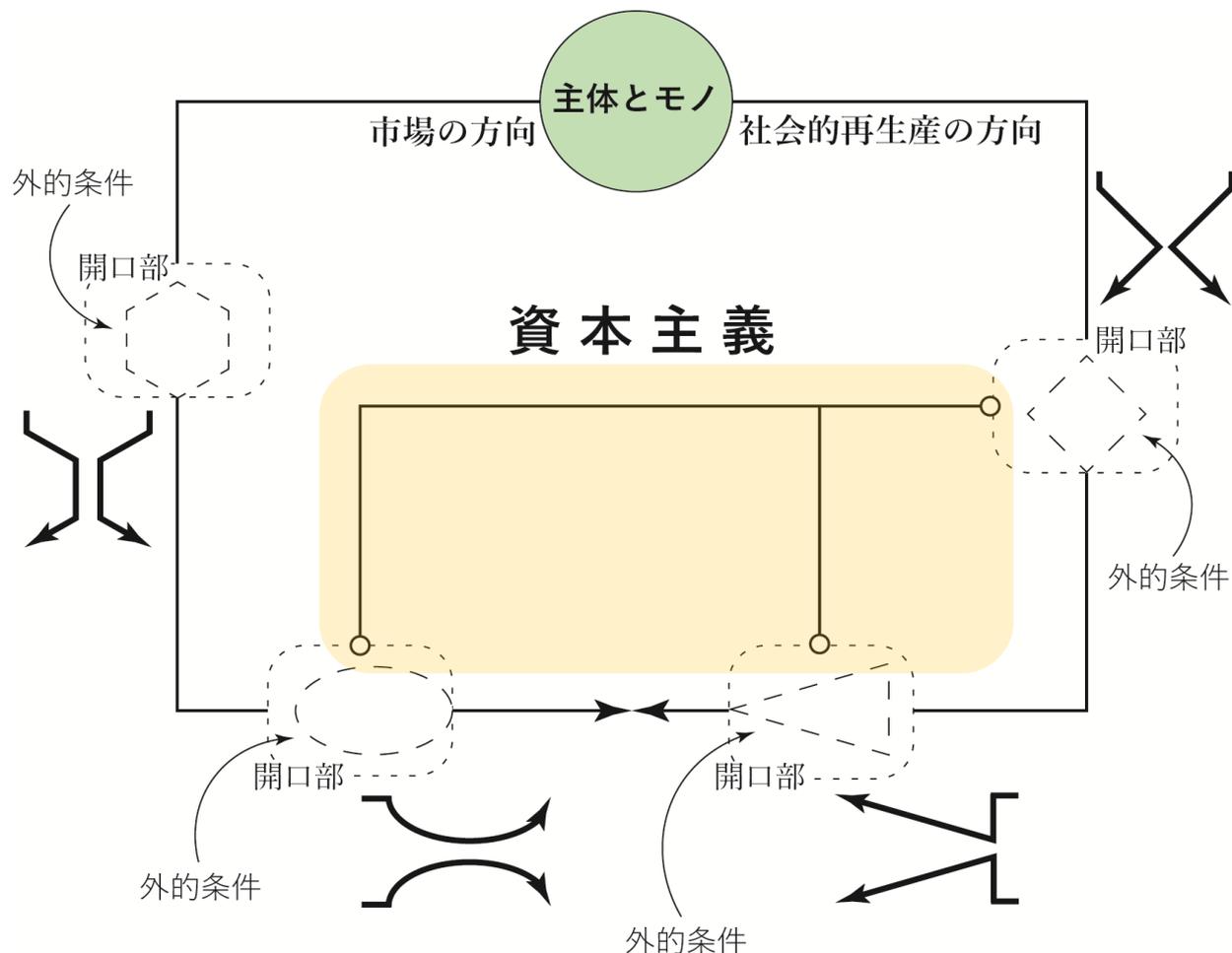


✓ 別の「外的条件」(A)が組み込まれると、資本主義の「外観」が変わる



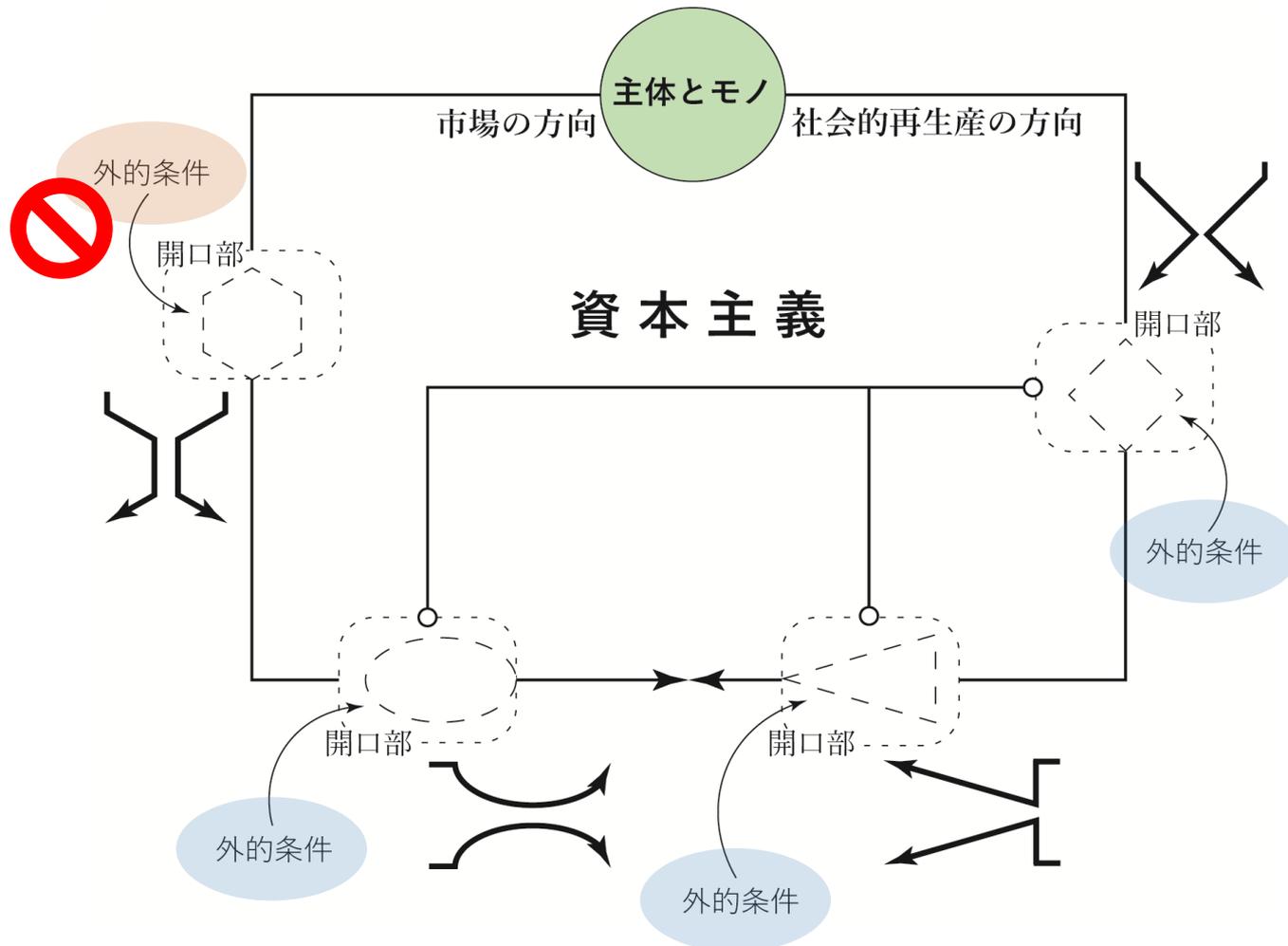
「変容論的アプローチ」

- 基礎理論の問題として追究すべき課題が、原作者から提示されています（前掲小幡 [2012] 237-40頁）
- ① 各開口部は、他の開口部とどのように連動している？



② 各開口部に作用する「外的条件」を一貫したものとして正当化する「イデオロギー」の考察

- として束ねられる「外的条件」のセットに反するを組み合わせてはできない



「現代」を捉えるためにさらに 求められること

- 報告者が理解する限りの「変容論的アプローチ」について、駆け足で説明してみました
 - ✓ 「資本主義なるもの」には、原理的にいくつかのタイプを生み出す仕組みが備わっている
 - 原作者から提示されている課題
 - 実際にどんなタイプの資本主義を構成できる？(原理論 + α)
 - 資本主義のタイプの構成方法として、
{(開口部への外的条件の作用) → **論理の分岐**}
というのとは異なるスタイルはあるか？
- 基礎理論の問題として、さらに詰めていく必要がありそうです

- 「開口部」と「外的条件」を確定して、資本主義が原理的に採りうるいくつかのタイプは解明できるとして…
 - ✓ 各タイプの差異は、資本主義の歴史的な発展(ある時期に始まって、やがて終わりを迎える)に対してどのような意味を持つ?
 - 基礎理論の問題として構成できる各タイプを、資本主義の歴史的な発展と突き合わせ、「現代」の意味を問う独自の考察領域が必要になるでしょう(→「原論」に没頭すれば自ずとワカルようになるわけではない)
 - **発展段階論**とよばれてきた領域だと思います

参考文献

宇野弘蔵 [1964] 『経済原論』(岩波文庫,2016年)

宇野弘蔵 [1971] 『経済政策論 改訂版』(宇野弘蔵著作集第7巻:
岩波書店,1974年)

小幡道昭 [2009] 『経済原論:基礎と演習』(東京大学出版会)

小幡道昭 [2012] 『マルクス経済学方法論批判』(御茶の水書房)

桜井毅・山口重克・侘美光彦・伊藤誠編 [1980] 『経済学 II』(有斐閣)

樋口均 [2016] 『国家論:政策論的・財政学的アプローチ』(創成社)

山口重克 [2006] 『類型論の諸問題』(御茶の水書房)

SGCIME編 [2017] 『第3版 現代経済の解説:グローバル資本主義と
日本経済』